

《遊行柳》と《忠度》——和歌を隠す趣向

樹下文隆

《遊行柳》は、『新古今集』所収の西行歌、道のべに清水流るる柳蔭 しばしとてこそ立ちとまりつれ

を構想の一つとしてゐる。この和歌を用する第3段「上ヶ歌」を含む前場では、西行に詠まれたことよつて名木となつた老木の、昔を懐かしむ心情が和歌的修辭を駆使して描き出されている。しかし、シテの懐旧という心情に直結しない印象がある西行歌の引用については、統一性に欠けるといふ批判もなされてきた。懐旧の主題で注目すべきは、朽ち木の柳が「昔を残す古塚」の上に生えていることである。墓のしるしに柳を植えるのは古代中国の墓制で、漢籍に用例のある他、謡曲でも《隅田川》の例がある。では、《遊行柳》の古塚に眠るのは一体誰であろうか。

結論を言えば、それは奥州に流された都の貴族なのである。失意の内にこの地で没した貴族の、都での華やかだった日々それが老木の柳の回想の正体であった。少なくとも、作者の信光は、そのつもりで古塚を登場させたはずだ。これについ

ては、以前に拙稿「《遊行柳》の構想——作品成立の文学的背景をめぐって——」（『能研究と評論』16号）で詳述したので、要点のみを記すと、西行歌の背景として、『新古今集』の菅原道真の和歌、

道のべの朽木の柳春來れば あはれ昔としのばれぞする

を指摘する説が、当時行なわれていた。高松宮本『新古今和歌集註』では、西行歌について、以下のような理解が示されている。

西行上人修行の時よめるにや。道のべの柳とは、下野国なすと奥州白河関とのさかひに、芦野と云所に有。聖廟の御詠に（和歌略）といふ歌よりよめるにや。

また、道真歌享受の側でも、『宗長秘歌抄』に次のような注がられる。

心は歌の上は柳のやうに見えて底は我身の事也。わが身を朽木にたとへて昔の春をしのぶ哀也。朽木の柳名所也。下野国也。清水流る、柳陰同所也。

さらに、道真家集の注釈書『菅家金玉抄』

は、

昔を忍ぶとは、聖廟の昔を忍ぶ思のほどを、柳によそへてよみ給ふ也。風流にのみじく聞え侍る。此集にも只か、らざる義也。心をそへて見るべし。西行歌本同（和歌略）と云。或本に、詩が心もこもれるにや、沅水羅紋海燕回、柳条牽、恨到「荊台」云々。

と、《遊行柳》で後シテ登場の「サシ」が引く「三体詩」李群玉「送客」詩をも、同じ基盤で理解している。「三体詩」の注釈書『三体詩素隠抄』では、詩題の「客」について

御内ハ時世不遇デ、コトサラ旅ナレバ、イト、愁ノミデアラフズヨ

と解し、「客ハ今日屈原ニテアランゾ」（『三体詩幻雲抄』所引統翠説）のごとく客を屈原に代表される配流者と説明する説もある。いうまでもなく、道真の太宰府左遷は事実上の配流であった。この時代に顕著な天神信仰の流行の中で、特に禅僧達によつて、屈原と道真とは梅と配流の縁で連想的に扱われる傾向があった（拙稿「謡曲《胡蝶》の構想——「梅花」に縁なき蝶」をめぐって——」、『中世文学』32号）。次の「竹林抄」に取られた連歌の例をも考慮すれば、かかる知識を享受した人々の面影も自ずと見えてくるであろう。

瘦せぬる影を哀れとぞ見る

道の辺になかば朽ちたる梅咲きて

心敬

これは、道真が太宰府へ赴く途次、水鏡で瘦せ衰えた自分の姿に愕然としたという故事を利用し、前句を「瘦梅」に取り、道しの道真に縁ある梅句を付けるが、
「道の辺の朽木」が、道真の故事付くのであることを言明している。同時に「道の辺の朽木」が、道真歌によって人口に膾炙したことも示している。西行歌自身は、現在の解釈通り何の懐旧性も認められないが、その背後に「道の辺の柳」をめぐる当時の理解が広がっていたのである。

《遊行柳》は、西行歌を全面に出しつつ、同じ柳を詠んだと理解されていた道真歌をわざと提示せず、その替わりに思わせ振りの「古塚」を登場させ、道真に代表される失意の貴族の物語を背景に暗示したのである。このことよって、柳は、道真一人に還元されることなく、道真をも含めた不遇の貴人たちの懐旧性の象徴として描かれ、より物語的深みを獲得したと言えよう。

当時の知識から言えばすぐに連想されてしかるべき和歌を、あえて用いないことで、逆にその和歌のイメージが、一曲の背景として強く意識され続ける。この趣向は、信光に限ったことではなく、世阿弥に先例があった。

世阿弥作《忠度》は、『平家物語』巻七「忠度都落」と巻九「忠度最期」に基づ

いている。

忠度は、一門の都落の際、藤原俊成に、勅撰集への入集を懇願し、結局、朝敵ゆえに作者を明かされずに、詠み人知らずとして、

さざ波や志賀の都は荒れにしを 昔ながらの山桜かな

が「千載集」に入集した。一の谷で忠度を討ちとった岡部六弥太は、忠度の簞に結ばれた、

行き暮れて木の下蔭を宿とせば 花や今宵の主ならまし

の短冊の署名で、相手が忠度であることを知った。以上のごとき『平家物語』を素材としつつ、《忠度》は、「さざ波や」歌に触れず、辞世でもある「行き暮れて」歌を構想の核に据えることで、「花の主」である忠度の風雅を際立たせている。最後が《敦盛》や《美盛》のように「跡弔ひてたび給へ」で終わらず、「花こそ主なりけれ」で締めくくられているのは、忠度が「花の主」であることを明瞭に物語っているし、冒頭の「花をも憂しと捨つる身」に対する見事な転換ともなっている。

「さざ波や」歌に言及しないのは、一曲の主題が希薄になることを恐れたためであろう。しかし、実は前シテの風体が、「さざ波や」歌を暗示するように思われるのである。前シテは、「山より帰る折ごとに 薪に花を折り添へ」（第2段「下ケ歌」）た風体として描かれる。これ

が、「薪負へる山人の、花の蔭に休める」と『古今集』仮名序で評された、六歌仙の一人大伴黒主を連想させる風体であることは言うまでもなからう。黒主が後に志賀明神と祀られたことは、歌学書などでも知られており、彼をシテとする《志賀》もある。その《志賀》で、前シテ登場「二セイ」が忠度の「さざ波や」歌を引用することも注目される。

以上を要するに、《忠度》における前シテの黒主的人物造型は、引用されることのない「さざ波や」歌を介して、「花の主」である忠度の、勅撰歌人としての側面を象徴させる趣向なのであった。このような趣向は、《忠度》単独でも理解可能だったと思われる。なお、《志賀》が世阿弥作であろうことは『謡曲集』（新潮日本古典集成）解題の指摘するところである。《忠度》以前に《志賀》が成立していたとすれば、観客はこの趣向を一層よく理解できたであろう。

次の『竹林抄』の配列は、宗祇にもこうした理解のあったことを推測させてくれる。

薪を負へる人かとぞ見る
山がつを我言の葉の姿にて
包む名も世に隠れなく成にけり
昔ながらの大和言の葉
心敬
宗砌

（広島女子大学助教授）